



「帰葬詩」に関する覚書(二)：杜甫の詩を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 秋正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005382

「帰葬詩」に関する覚書（二）

―杜甫の詩を中心として―

北海道教育大学札幌校漢文学研究室

後藤秋正

一

前稿では、漢魏晋南北朝期における帰葬の実態と帰葬を詠ずる詩文について考察を試みた。本稿では前稿に引き続いて、唐詩において帰葬がいかに詠じられているかについて見てゆく。前稿の冒頭で杜甫の帰葬について触れたが、唐代の帰葬の一例として、ここでは女性の手によったものを挙げておこう。『旧唐書』卷百九十三、列女伝には、女道士李玄真、王和子、鄭神佐の女の三者がそれぞれ亡父などを帰葬した記録があるが、王和子の事例を引用しておく。¹⁾

孝女王和子者、徐州人。其父及兄為防秋卒、戍涇州。元和中、吐蕃寇辺、父兄戦死、無子、母先亡。和子時年十七、聞父兄没於辺上、被髮徒跣縗裳、独往涇州、行丐取父兄之喪、帰除宮葬、手植松柏、剪髮壞形、廬於墓所。

孝女王和子は、徐州の人。其の父及び兄は防秋の卒と為り、涇州を成る。元和（八〇六―八二〇）中、吐蕃 辺に寇し、父兄は戦死す、子無く、母は先に亡す。和子 時に年十七、父兄の辺上に没するを聞き、被髮・徒跣・縗裳して、独り涇州に往き、行きて父兄の喪を丐取し、除の宮に帰りて葬り、手ずから松柏を植え、髪を剪り形を壊り、墓所に廬す。

具体的な唐代の帰葬の例については個々の詩に対応して見て行くこととし、唐代においても帰葬の風習は決して衰退することなく、いよいよ盛んになっていたことを確認しておきたい。²⁾ 以下、唐代の帰葬を詠ずる詩について年代を追って見て行くことにする。管見によると『全唐詩』の中に、詩題に帰葬、また

は帰葬に関連する事柄を詠じたことを明示するのは左記の詩である。仮に『全唐詩』の巻数を付記し、その順に挙げる。

- ①劉長卿「送李將軍」(卷一五二)
- ②杜甫「送盧十四弟侍御護韋尚書靈輓歸上都二十四韻」(卷二二三)
- ③杜甫「承聞房相公靈輓自閬州啓殯歸葬東都有作二首」(卷二二九)
- ④杜甫「哭嚴僕射歸輓」(卷二二九)
- ⑤王建「送阿史那將軍安西迎旧使靈輓」(卷三〇〇)
- ⑥陳羽「觀朱舍人歸葬吳中」(卷三四八)
- ⑦劉言之「聞崔倚旅葬」(卷四六八)
- ⑧劉言之「桂江逢王使君旅輓」(卷四六八)
- ⑨廖有方「題旅輓」(卷四九〇)
- ⑩唐彦謙「咸通中始聞褚河南歸葬陽翟、是歲上平徐方大肆慶賞、又詔八品錫其裔孫、追叙風概、因成二十韻」(卷六七二)
- ⑪貫休「春送趙文觀送故合州座主神輓歸洛」(卷八三七)

帰葬を詩題に明示する作品は一見少なく思われるが、実は詩中で帰葬に言及するものはこれのみにとどまらない。帰葬に言及する挽歌詩(挽歌詞)・送葬詩・哭人詩なども多いからである。次に、「帰葬(帰葬)」「返葬(還葬)」、及びこれに関連する「旅葬」「旅輓(扶輓)」の語が見える詩句を項目ごとに挙げてみよう。³⁾ 詩句、作者、詩題、『全唐詩』の巻数の順に挙げ、すでに挙げた①～⑪の詩中の用例は省略する。

(1) 帰葬(帰葬)

- (a) 同盟会五月 帰葬出三条 同盟して五月に会し 帰葬して三条より出づ (宋之問「魯忠王挽詞三首」(其の一)、卷五二)
- (b) 本家清渭曲 帰葬旧塋辺 本と家す清渭の曲 帰葬す旧塋の辺 (王維「哭祖六自虛」、卷二二八)
- (c) 那堪帰葬日 哭渡柳楊津 那ぞ堪えん帰葬の日 哭して渡る柳楊の津 (竇常「故秘監丹陽郡公延陵包公挽歌詞」、卷二七一)
- (d) 旧墓人家帰葬多 堆著黄金無買処 旧墓 人家 帰葬すること多く 黄金を堆著するも買う処無し (王建「北邙行」、卷二九八)
- (e) 身没欲帰葬 百姓遮路岐 身没して帰葬せんと欲するに 百姓 路岐に遮る (白居易「立碑」、卷四二五)
- (f) 北固暴亡兼在路 東都榷葬未帰塋 北固に暴かに亡して兼に路に在り 東都に榷葬して未だ塋に帰せず (盧延讓「哭李郢端公」、卷七一五)
- (g) 送終時有雪 帰葬処無雲 終りを送るに時に雪有り 帰葬するに処として雲無し (仁翻「哭友人」、卷七二七。項斯「哭南流人」に類似句あり。)
- (2) 返葬(還葬)

- (a) 返葬長安陌 秋風簫鼓悲 返葬す長安の陌 秋風 簫鼓悲しむ（張九齡「故徐州刺史贈吏部侍郎蘇公挽歌詞三首」〈其の三〉、卷四八）
- (b) 客死嶮関路 返葬岐江陽 客死す嶮関の路 返葬す岐江の陽（張説「過懷王墓」、卷八六）
- (c) 返葬金符守 同帰石窠妻 返葬す金符の守 同に帰る石窠の妻（王維「故西河郡杜太守挽歌三首」〈其の二〉、卷二二六）
- (d) 送君返葬石樓山 松柏蒼蒼賓馭還 君が石樓山に返葬せらるるを送る 松柏 蒼蒼として賓馭還る（王維「送殷四葬」、卷二二八）
- (e) 有吳君子墓 返葬故山遥 吳の君子の墓有り 返葬するに故山遥かなり（竇牟「故秘監丹陽郡公延陵包公挽歌」、卷二七一）
- (f) 門吏看還葬 宮官識賜衣 門吏は還葬を看 宮官は衣を賜うを識る（李端「張左丞輓歌二首」〈其の二〉、卷二八五）
- (g) 返葬三千里 荊衡達帝畿 返葬す三千里 荊衡より帝畿に達す（劉禹錫「湖南觀察使故相國袁公挽歌三首」〈其の三〉、卷三五七）
- (3) 旅葬
- (a) 旅葬無高墳 栽松不成行 旅葬 高墳無く 栽松 行を成さず（孟郊「哭李觀」、卷三八一）
- (b) 旅葬不可問 茫茫西隴頭 旅葬 問うべからず 茫茫たり西隴の頭（許渾「傷憑秀才」、卷五三一）
- (c) 臨終時有雪 旅葬処無雲 臨終 時に雪有り 旅葬 処として雲無し（項斯「哭南流人」、卷五五四）
- (d) 旅葬新墳小 遺孤遠俗輕 旅葬 新墳小さく 遺孤 遠俗軽んず（鄭谷「哭進士李洞二首」〈其の一〉、卷六七四）
- (e) 旅葬新墳小 魂帰故国遥 旅葬 新墳小さく 魂帰 故国遥かなり（李洞「賈島墓」、卷七二二）
- (4) 旅櫬（扶櫬）
- (a) 駐罕歌叙靈 命徒封旅櫬 駐罕して叙靈を歌い 徒に命じて旅櫬を封ず（徐彦伯「比干墓」、卷七六）
- (b) 故園荒岷曲 旅櫬寄天涯 故園 岷曲に荒れ 旅櫬 天涯に寄す（劉長卿「哭張員外繼」、卷一四九）
- (c) 旅櫬帰程傷道路 举家行哭向田園 旅櫬 帰程 道路に傷み 举家 行くゆく哭して田園に向かう（劉長卿「哭陳歙州」、卷一五一）
- (d) 主人薨城府 扶櫬帰咸秦 主人 城府に薨じ 櫬を扶けて咸秦に帰る（杜甫「別蔡十四著作」、卷二二〇）
- (e) 客亭鞍馬絶 旅櫬網虫懸 客亭 鞍馬絶え 旅櫬 網虫懸かる（杜甫「哭李尚書之芳」、卷二二二）
- (f) 人生倏忽間 旅櫬飄若遺 人生 倏忽の間 旅櫬 飄として遺るが若し（顧況「哭從兄衰」、『文苑英華』卷三〇三。『全唐詩』卷二六五は、櫬を櫬に作る。）
- (g) 素帷旅櫬郷関遠 丹旛弧燈客舍中 素帷 旅櫬 郷関遠く 丹旛 弧燈 客舍の中（劉商「同諸子哭張元易」、卷三〇四）
- (h) 政成身没共興衰 郷路兵戈旅櫬迴 政成り身没して興衰を共にし 郷路 兵戈 旅櫬迴る（許渾「傷故湖州李郎中」、卷五三四）
- (i) 主祭孤兒初学語 無媒旅櫬未還郷 祭りを主る孤兒は初めて語を学び 媒無き旅櫬は未だ郷に還らず（儲嗣宗「哭彭先生」、卷五九四）

ここでは「帰葬」「返葬」「旅葬」「旅櫬」などの用例を拾ってみたが、以上のことから、唐代に至ると「帰葬」「返葬」及びこれに関連する「旅葬」などの語が詩語として定着するようになったことが理解される。また、(1)の(g)と(3)の(c)、(2)の(e)と(3)の(e)、(3)の(d)と(3)の(e)のように、何らかの影響関係をうかがわ

せる詩句の存在も注意される。

二

唐代に詠じられた婦葬詩について考える手始めとして、まず杜甫（七一二―七七〇）の三篇を制作年次順に見てゆくことにしたい。まず、五律「哭嚴僕射婦櫬」〔『杜詩詳注』卷一四〕を取り上げよう。この詩は、黄鶴注に「当在渝忠時作。」（当に渝・忠に在りし時の作なるべし。）と言う。詩中に「三峽」の語が見られるから、三峽に近い長江のほとりでの作であることは確かである。永泰元年（七六五）五月、前月に嚴武が亡くなって庇護者を失った杜甫は成都を離れ、嘉州（四川省樂山市）、戎州（同宜賓市）、渝州（同重慶市）を経て、同年の秋までには忠州（同忠県）に至っている。

素幔随流水	素幔	流水に随い
婦舟返旧京	婦舟	旧京に返る
老親如宿昔	老親は宿昔の如きも	
部曲異平生	部曲は平生に異なる	
風送蛟竜匣	風は送る蛟竜の匣	
天長驃騎營	天は長し驃騎の營	
一哀三峽暮	一哀して三峽暮れ	
遺後見君情	遺されし後君が情を見る	

華州華陰（陝西省華陰市）の人である嚴武（七二六―七六五）の死について、『旧唐書』卷百十七の本伝は、「永泰元年四月、以疾終。時年四十。」（永泰元年四月、疾を以て終る。時に年四十。）と極めて簡略に述べており、『新唐書』卷百二十九の本伝は、「永泰初卒、母哭、且曰、而今而後、吾知免為官婢矣。年四十、贈尚書左僕射。」（永泰の初め卒す。母哭して、且つ曰く、而今而後、吾官婢と為るを免るるを知ると。年四十、尚書左僕射を贈らる。）と言い、真偽の定かでない母親の言葉を李肇『唐国史補』から取り入れてはいるが、いずれも婦葬には言及しない。嚴武がどこに埋葬されたかははっきりしないが、彼の父嚴挺之（六七一―？―七四二）の「自撰墓誌」〔『全唐文』卷二八〇〕は、仏教に帰依していた自身の死を予期して書かれたものであり、大照和尚の塔側近くに葬ることを遺言して、「天宝元年……、其年九月、寢疾、終於洛陽某里私第。十一月、葬於大照和尚塔次西原、礼也。」（天宝元年……、其の年九月、疾に寝ね、洛陽某里の私第に終る。十一月、大照和尚の塔次の西原に葬るは、礼なり。）と言っている。大照和尚（大照禪師）は、普寂（六五一―七三九）の弟の嚴損之のために独孤及が撰した「唐故銀青光祿大夫太子左庶子嚴公墓誌銘」〔『全唐文』卷三九二〕には、

広徳二年六月二十五日、終於襄陽、是歳八月、權窆楚山西原冢。……大曆三年、歳在戊申、五月二十九日、返葬洛陽先塋、礼之至也。
 広徳二年六月二十五日、襄陽に終り、是の歳八月、權に楚山の西原の冢に窆る。……大曆三年、歳は戊申に在り、五月二十九日、洛陽の先塋に返葬するは、礼の至りなり。

とあって、嚴損之が襄陽（湖北省襄樊市）の南にある楚山（一名、望楚山）に殯葬されたのちに、洛陽に帰葬されたことが知られるから、恐らく嚴武も洛陽近郊の墓所に埋葬されたものであろう。『杜詩詳注』はこの詩の全体の構成について、

上四、叙帰櫬、下四、哀僕射。武本華陰人、故返於旧京。老親猶在、而部下人稀。此帰路之可哀者。風送舟行、而軍營長寂。此去後之可哀者。至想到平日交情、尤足傷心酸鼻。所以一哀而日暮也。

上四は、帰櫬を叙べ、下四は、僕射を哀しむ。武は本と華陰の人、故に旧京に返る。老親は猶お在り、而るに部下は人稀なり。此れ帰路の哀しむべき者なり。風は舟行を送る、而して軍營は長く寂たり。此れ去りし後の哀しむべき者なり。想いの平日の交情に到るに至っては、尤も傷心・酸鼻するに足る。一哀して日暮るる所以なり。

と云う。これは妥当な見方であろう。ただし、『杜臆』巻六の見解、特に第二句についてのそれは、「嚴公之母待公甚厚。公在三峡、帰櫬所経、公往哭之、必謁其母、故云如宿昔。」（嚴公の母 公を待すこと甚だ厚し。公 三峡に在りて、帰櫬の経る所、公 往きて之を哭するとき、必ず其の母に謁せん、故に宿昔の如しと云う。）と云う。『杜詩詳注』の見解とは異なる。『杜臆』は、嚴武の母親も彼の任地の成都にいて杜甫とも会っており、帰櫬に伴って長安へ帰るとみなしているのである。ここで、詩中のいくつかの語について確認しておこう。「素幔」は服喪や葬儀に用いる白いとばり、まんまく。「素帷」と同じ。「素帷」は、潘岳「寡婦賦」、『文選』巻一六）に、「代羅幃以素帷。」（羅幃に代うるに素帷を以てす。）とあり、「素幔」は、やや後の例になるが、于鵠の五律「哭王都護」〔『全唐詩』巻三二〇〕に、

素幔朱門裏 素幔 朱門の裏
 銘旌秋巷中 銘旌 秋巷の中

と見える。「帰舟」は、ここでは柩を載せて帰る舟。謝靈運「酬從弟惠連五首」〈其の五〉（『文選』巻二五）に、

夢寐佇帰舟 夢寐にも帰舟を佇ち

積我吝与劳 我が吝と劳とを積かん

と見えているが、杜詩においては「眺望白帝城塩山」(『杜詩詳注』巻一五)に、

春城見松雪 春城 松雪を見
始擬進帰舟 始めて帰舟を進めんと擬す

とあるように、郷里に帰る舟を指すことが多いようだ。「旧京」は、古都。ここでは洛陽。盧諶「贈崔温」詩(『文選』巻二五)に、

北眺沙漠垂 北のかた沙漠の垂を眺め
南望旧京路 南のかた旧京の路を望む

とある。「蛟竜匣」は、みずちと竜の彫刻のある棺。諸注とも『西京雜記』巻一にある、「漢帝送死、皆珠襦玉匣。匣形如鎧甲、連以金縷。武帝匣上、皆鑲為蛟竜鸞鳳龜麟之象。世謂為蛟竜玉匣。」(漢帝の死を送るは、皆な珠襦・玉匣なり。匣の形は鎧甲の如く、連ぬるに金縷を以てす。武帝の匣上、皆な鑲りて蛟竜・鸞鳳・龜麟の象を為す。世謂いて蛟竜の玉匣と為す。)という記事を引いている。杜甫の「八哀詩・故司徒李光弼」(『杜詩詳注』巻一六)にも、

平生白羽扇 平生 白羽の扇
零落蛟竜匣 零落す蛟竜の匣

と言う。「一哀」は、ひとたび激しく悲しむこと。『礼記』檀弓上に孔子の語として、「予郷者入而哭之、遇於一哀而出涕。」(予郷者に入りて之を哭し、一哀に遇いて涕を出だす。)と言い、同じく『礼記』曾子問に、「衆主人、卿大夫士、房中、皆哭、不踊。尽一哀反位、遂朝奠。」(衆主人、卿・大夫・士、房中、皆な哭し、踊らず。一哀を尽くして位に反り、遂に朝奠す。)と言うように死の悲哀と結びつく。柩を護送する部下の人数は少ないとはいえ、嚴武の地位にふさわしい格式をもって嚴肅に帰葬されることが、杜甫の深い悲哀と重なり合って詠じられている。杜甫が嚴武の死を回顧するのはこの詩においてだけではない。「諸將五首」(其の五)、『杜詩詳注』巻一六)では、

正憶往時嚴僕射 正に憶う往時の嚴僕射
共迎中使望郷台 共に中使を迎う望郷台

と詠ずるし、「八哀詩・贈左僕射鄭国公嚴武」〔『杜詩詳注』卷一六〕では、帰葬の時を振り返りつつ、次のように詠じた。

顔回竟短折	顔回は竟 <small>つひ</small> に短折し
賈誼徒忠貞	賈誼 <small>いたずら</small> は徒に忠貞なり
飛旒出江漢	飛旒 江漢に出で
孤舟転荆衡	孤舟 荆衡に転ぜんとす

嚴武の死が杜甫の晩年に暗い影を落としていたことは確実である。

次に「承聞房相公靈輓自閬州啓殯帰葬東都有作二首」〔『杜詩詳注』卷一四〕を見よう。この詩について黄鶴注は、「琯卒於広徳元年、権瘞閬州。二年春、公有詩別其墓。今云孤魂久客間、則此詩作於永泰元年。是時公在雲安、故云遠聞。」（琯は広徳元年に卒し、閬州に権瘞せらる。二年春、公に詩有りて其の墓に別る。今 孤魂久客の間と云えば、則ち此の詩は永泰元年に作る。是の時 公は雲安に在り、故に遠く聞くと云う。）と言っている。

遠聞房太尉	遠く聞く房太尉
帰葬陸渾山	陸渾山に帰葬すと
一徳興王後	一徳 興王の後
孤魂久客間	孤魂 久客の間
孔明多故事	孔明 故事多く
安石竟崇班	安石 竟に崇班
他日嘉陵涙	他日 嘉陵の涙
仍霑楚水還	仍お楚水を霑して還る 〈其の一〉

丹旒飛飛日	丹旒 飛飛たる日
初伝発閬州	初めて伝う閬州を発すと
風塵終不解	風塵 終に解けず
江漢忽同流	江漢 忽ち流れを同じくす
劍動親身匣	劍は動く親身の匣

書婦故国楼 書は帰る故国の楼
 尽哀知有処 哀しみを尽くすに処有るを知るも
 為客恐長休 客と為りて恐らくは長く休せん 〈其の二〉

房琯（六九五―七六一）の生涯について、特にその死については『旧唐書』卷百十一の本伝のほうが『新唐書』のそれよりも詳細である⁽⁸⁾。

房琯、河南人、天后朝正議大夫・平章事融之子也。……性好隱遁、与東平呂向於陸渾伊陽山中讀書為事、凡十余載。……上元元年四月、改礼部尚書、尋出為晋州刺史。八月、改漢州刺史。……宝応二年四月、拜特進・刑部尚書。在路遇疾、広徳元年八月四日、卒於閬州僧舍、時年六十七、贈太尉。

房琯は、河南の人、天后朝の正議大夫・平章事融の子なり。……性 隱遁を好み、東平の呂向と陸渾伊陽の山中に於いて書を読むを事と為すこと、凡そ十余載。……上元元年四月、礼部尚書に改められ、尋いで出でて晋州刺史と為る。八月、漢州刺史に改めらる。……宝応二年四月、特進・刑部尚書に拜せらる。路に在りて疾に遇い、広徳元年八月四日、閬州の僧舎に卒す、時に年六十七、太尉を贈らる。

〈其の二〉から見よう。「陸渾山」は方山とも言う。洛陽の南、河南省嵩山の東北、伊水の西岸にある山。杜甫の陸渾荘もこの付近にあり、華州司功參軍に左遷された時に再びここを訪れて、「時婦在河南陸渾莊」（時に婦りて河南の陸渾荘に在り。）という自注のある「憶弟二首」（『杜詩詳注』卷六）を作っている。「崇班」は、高い地位。初唐から盛唐にかけての人である盧懷慎の五律「奉和九日幸臨渭亭登高応制、得還字」（『全唐詩』卷一〇四）に、

無因酬大徳 因りて大徳に酬いる無く
 空此媿崇班 空しく此に崇班を媿ず

と言う。尾聯は、広徳二年（七六四）の春、成都に戻ろうとして嘉陵江のほとりの町である閬州（四川省閬中県）に殯葬されていた房琯の墓に涙を注いで別れを告げ、その涙を含んだ水が今また長江を流れてゆくことを言う。「楚水」は三峡より下流の長江。江淹「江上之山賦」（『江文通集』卷一）の冒頭に、「潺湲澗溶兮、楚水而呉江」（潺湲・澗溶たり、楚水と呉江と）と言う。杜甫の「別房太尉墓」（『杜詩詳注』卷一三）の前半は、次のように詠じられる。

他郷復行役 他郷 復た行役し
 駐馬別孤墳 馬を駐めて孤墳に別る
 近涙無乾土 涙に近きは乾土無く
 低空有断雲 空に低れて断雲有り

杜甫はこの詩を詠じたばかりではなく、前年に房琯が亡くなった後、一か月半ほど経ってここを訪れ、房琯との交遊をしのび、彼の左遷についての死を悼んで「祭故相国清河房公文」（『杜詩詳注』巻二五）を書いている。

維唐広徳元年、歳次癸卯、九月辛丑朔、二十二日壬戌。京兆杜甫、敬以醴酒茶藕蓴鯽之奠、奉祭故相国清河房公之靈曰、……有車爰送、有紼爰操。撫墳日落、脱劍秋高。我公戒子、無作爾勞。斂以素帛、付諸蓬蒿。身瘞万里、家無一毫。……山東雖定、灞上多車。憂恨展転、傷痛飶飶。……致祭者酒、陳情者文。何当旅櫬、得出江雲。嗚呼哀哉、尚饗。

維れ唐の広徳元年、歳次癸卯、九月辛丑朔、二十二日壬戌。京兆の杜甫、敬んで醴酒・茶藕・蓴鯽の奠を以て、故相国清河の房公の靈を祭り奉りて曰く、……車有りて爰に送り、紼有りて爰に操る。墳を撫して日は落ち、劍を脱して秋は高し。我が公子を戒めて、爾が勞を作す無からしむ。斂むるに素帛を以てし、諸を蓬蒿に付す。身は万里に瘞められて、家に一毫無し。……山東は定まると雖も、灞上に軍多し。憂恨展転として、傷痛飶飶たり。……祭を致せしは酒、情を陳ぶるは文。何か当に旅櫬、江雲より出づるを得べき。嗚呼哀しい哉、尚くは饗けよ。

この祭文では、房琯が薄葬を遺言したことを述べ、その平生の質素な暮らしぶりをしのびつつ、いつになったら旅櫬が嘉陵江の空に浮かぶ雲のもとから出ていけるのだろうかかと危ぶんでいる。

続く〈其の二〉の「丹旛」は、出喪の時に用いられる死者の姓名を記した赤い銘旌。しばしば墓誌銘などに見られる語であるが、例えば何遜「王尚書瞻祖日」（『何記室集』巻二）の冒頭に、

昱昱丹旛振 昱昱として丹旛振るい
亭亭素蓋立 亭亭として素蓋立つ

とある。「江漢」は、長江と嘉陵江（西漢水）を指す。一句は房琯のひつぎが、嘉陵江から、杜甫も下って行く長江を通して帰葬されることを言う。「親身」は、身につけること。『韓非子』巻四、奸劫弑臣に「親身衣」の語が見え、謝惠連「代古」詩（『玉台新詠』巻三）に、

裁為親身服 裁ちて親身服と為し
著以俱寢興 著くるに俱寢興を以てす

と言う。「故国」を故郷の意味で用いる例は多いが、例えば江淹「去故郷賦」（『江文通集』巻一）には、「泣故関之已尽、傷故国之無際」（故関の已に尽きた

るを泣き、故国の際無きを傷む」と見えている。尾聯の「尽哀」は、先に引いた『礼記』曾子問の語と、さらには『史記』卷四十七、孔子世家の、「孔子葬魯城北泗上、弟子皆服喪三年。三年心喪畢、相訣而去、則哭、各復尽哀。」（孔子、魯城の北の泗上に葬られ、弟子は皆な喪に服すること三年。三年の心喪畢わり、相い訣れて去らんとするに、則ち哭し、各おの復た哀しみを尽くす。）という記事を踏まえている。「処」は陸渾山を指す。本来ならば帰葬されるさきの陸渾山の墓所で哀哭しなければならぬのに、旅人となっている身ではそれがままならないことを言う。この句には自身の帰郷もいつ果たされるかわからないという強い不安が投影されている。杜甫のこの詩は、「別房太尉墓」「祭故相国清河房公文」と密接な関連をもっており、一連の作品として解すべきものである。また杜甫は、成都を離れて長江を雲安まで下ったときに、蔡著作が郭英又の柩につき添って咸秦（陝西省咸陽市）に帰葬しようとするのに出会い、「別蔡十四著作」（『杜詩詳注』卷一四）を作って別れた。

主人薨城府 主人 城府に薨じ

扶輓婦咸秦 輓を扶けて咸秦に帰る

巴道此相逢 巴道 此に相い逢うに

会我病江滨 会^{たま}たま我 江滨に病む

郭英又は『旧唐書』卷百十七の本伝によれば、嚴武が卒したのち劍南節度使となって成都の尹を兼ねた。しかし、奢侈を極めて粗暴な振る舞いが多かったために、人心を得ていた西山兵馬使崔旰がこれを襲って逃亡させる。本伝は、英又の死について、

未嘗問百姓間事、人頗怨之。又西山兵馬使崔旰得衆心、屢抑之。旰因蜀人之怨、自西山率麾下五千余衆襲成都、英又出軍拒之、其衆皆叛、反攻英又。英又奔於簡州、普州刺史韓澄斬英又首以送旰、并屠其妻子焉。

未だ嘗て百姓間の事を問わず、人頗る之を怨む。又西山兵馬使崔旰 衆心を得、屢しば之を抑えんとす。旰 蜀人の怨むに因りて、西山より麾下五千余衆を率いて成都を襲い、英又 軍を出だして之を拒ぐに、其の衆 皆な叛き、反って英又を攻む。英又 簡州に奔らんとするに、普州刺史韓澄 英又の首を斬りて以て旰に送り、并せて其の妻子を屠る。

と記す。蔡著作は鳳翔の行在所で杜甫と出会って以来の知友であった。英又が悪政を敷いたとはいえ、成都に殯葬されていた彼の遺骸を忠節を尽くして護送する蔡著作の姿勢に、既に仕える主を失った杜甫は限りない共感を覚えたのであろう。

次に「送盧十四弟侍御護章尚書靈輓婦上都二十四韻」（『杜詩詳注』卷二三）を見よう。『杜詩詳注』に引く黃鶴注は、「当は大曆四年冬潭州作。」（当に是れ大曆四年冬 潭州の作なるべし。）と言う。大曆四年（七六九）正月、杜甫は岳陽（湖南省岳陽市）から潭州（湖南省長沙市）に来て「江閣」にしばらく住んだ後は、湘水に浮かべた舟を住まいとしていた。詩題の「盧十四弟侍御」についてははっきりしないが、『杜詩詳注』は「公之祖母盧氏、十四其表弟也。」

（公の祖母は盧氏、十四は其の表弟なり。）と言う。また、韋之晋については新・旧『唐書』に単独の伝はなく、『旧唐書』卷十一、代宗紀に、大曆四年（七六九）二月の記事として、「辛酉、以湖南都団練觀察使・衡州刺史韋之晋為潭州刺史、因是徙湖南軍於潭州。」（辛酉、湖南都団練觀察使・衡州刺史韋之晋を以て潭州刺史と為し、是れに因りて湖南軍を潭州に徙す。）とあり、『旧唐書』卷百四十、張建封伝に、「大曆初、道州刺史裴虬薦建封於觀察使韋之晋、辟為參謀、奏授左清道兵曹、不樂吏役而去。」（大曆の初め、道州刺史裴虬 建封を觀察使韋之晋に薦め、辟して參謀と為し、奏して左清道兵曹を授くるも、吏役を樂しまずして去る。）とある。杜甫は韋之晋が衡州から潭州へ赴任する時に五律「奉送韋中丞之晋赴湖南」〔杜詩詳注〕卷二二を書いている。

さて、この詩の構成については『読杜心解』卷五の四に、「此詩護櫬、只作一頭、在十二句截。中一長段、皆規勉盧十四歸朝以後之詞。末則自叙客況別情也。」（此の詩の護櫬は、只だ一頭を作すのみにして、十二句に在りて截つ。中の一長段は、皆な盧十四の歸朝以後を規勉するの詞。末は則ち自ら客況と別情を叙ぶるなり。）と指摘するように、帰葬に即して詠じられるのは前半部分であり、中間十六句は、悪政への批判を展開しながら盧侍御に天子を補佐して職務を尽くすように激励している。末尾の八句は、潭州にとどまる自身の悲哀を述べている。ここでは冒頭から十六句を引く。

素幙度江遠	素幙	江を度ること遠く
朱幡登陸微	朱幡	陸に登ること微かなり
悲鳴駟馬顧	悲鳴	駟馬顧み
失涕万人揮	失涕	万人揮う
參佐哭辞畢	參佐	哭辞し畢らば
門闌誰送帰	門闌	誰か帰るを送らん
従公伏事久	公に從いて伏事すること久しく	
之子俊才稀	之子	俊才稀なり
長路更執紼	長路	更に紼を執り
此心猶倒衣	此の心	猶お衣を倒にす
感恩義不小	感恩	義小ならず
懷旧礼無違	懷旧	礼違うこと無し
墓待竜驤詔	墓は待つ	竜驤の詔
台迎獬豸威	台は迎う	獬豸の威
深衷見士則	深衷	士則を見る
雅論在兵機	雅論	兵機に在り

簡単に語句について見ておこう。「素幘」は喪葬に用いる白いたれぎぬ。素帷・素帳と同じ。「哭嚴僕射婦櫬」には素幔の語があった。「朱幡」は、やや後の例になるが李益「大禮畢皇帝御丹鳳門改元建中大赦」(『全唐詩』卷二八二)に、

靈鷄鼓舞承天赦 靈鷄 鼓舞 天赦を承け
高翔百尺垂朱幡 高翔 百尺 朱幡を垂る

と見えている。ただし、この朱幡は、絳幡と同じものであり、大赦の儀式に用いるあかい垂れぎぬを指している。杜詩の朱幡は丹旒を言い換えたものである。杜甫が常套的な語彙を周到に避けていることがうかがわれる部分である。第一・二句は、韋之晋の「靈櫬」が湘水を下り、陸路と水路を通過して北上することを言う。「参佐」は韋之晋の属僚たち。陶淵明「晋故征西大將軍長史孟府君伝」(『陶靖節集』卷八)に、「九月九日、温遊竜山、参佐畢集、四弟二甥咸在坐。」(九月九日、温 竜山に遊び、参佐 畢く集り、四弟二甥 咸な坐に在り。)と言う。「哭辞」は他の用例を見ないが、哭して柩に別れを告げることであろう。「伏事」は下僚として従い仕えること。陸機「呉王郎中時從梁陳作」(『文選』卷二六)に、

誰謂伏事淺 誰か謂わん伏事浅しと
契闊踰三年 契闊して三年を踰えたり

とある。「執紼」は柩を載せた車の牽きづなを手執ること。転じて広く送葬を言う。『礼記』曲礼上には、「助葬必執紼。」(葬を助くるには必ず紼を執る。)と言ひ、同じく『礼記』檀弓下には、「弔於葬者必執引。若從柩及壙、皆執紼。」(葬を弔う者は必ず引を執る。若し柩に従いて壙に及べば、皆な紼を執る。)と言う。やや後の例になるが、周朴の七律「哭李端」(『全唐詩』卷六七三)に、

不及此時親執紼 此の時 親ら紼を執るに及ばず
石門遥想淚沾襟 石門 遥かに想いて涙 襟を沾す

とある。「倒衣」は、『詩経』齊風・東方未明に基づく語であり、臣下が早朝の出仕のためにあわてて衣裳をさかさまに身に着けること。転じて忠実に公務を果たすことを言う。

第七句から第十二句までは、盧侍御が韋之晋の死後も忠節を尽くすことを言う。「竜驤」は、竜驤將軍となり、呉の平定に功のあった王濬(二〇六―二八五)を指す。『晋書』卷四十二、王濬伝に、「太康六年卒、時年八十、諡曰武。葬柏谷山、大宮塋域、葬垣周四十五里、面別開一門、松柏茂盛。」(太康六年卒、時に年八十、諡して武と曰う。柏谷山に葬り、大いに塋域を営み、葬垣 周四十五里、面別に一門を開き、松柏 茂盛す。)と、王濬が朝廷から広大な

墓域を柏谷山（山西省長治市の北）に賜ったことを言う。従って「竜驤詔」は、韋之晋が朝廷から墓所を賜ることを指す。「獬豸」は、人の曲直を見分ける
とされる神獸。例えば『後漢書』卷三十、輿服志下、法冠の条では、「法冠、一曰柱後。……執法者服之、侍御史・廷尉正監平也。或謂之獬豸冠。獬豸神羊、
能別曲直、楚王嘗獲之、故以為冠。」（法冠、一に柱後と曰う。……法を執る者は之を服す、侍御史・廷尉正監平なり。或いは之を獬豸冠と謂う。獬豸は神羊、
能く曲直を別つ、楚王 嘗て之を獲、故に以て冠と為す。）と説明している。また、『唐六典』卷十三、御史台の条には、「大事則冠法冠、……小事、常服而
已。」（大事には則ち法冠を冠る、……小事には、常服なるのみ。）とある。法を執行する官である侍御史は獬豸冠をかぶった。ここは盧侍御を言う。
この詩においては、韋之晋を追憶し、彼の死を哀悼する姿勢よりも、盧侍御の朝廷での活躍を期待する気持ちが強く表れている。それは送別の宴の果てた
のちの自身の感慨を言う直前の、盧侍御が栄達して天子のお側近くに仕えるようになれば、「衰朽」の人である自身も再び花咲き香るであろうと述べる次の
句からも明らかである。

対揚期特達 対揚 特達を期せよ
衰朽再芳菲 衰朽 再び芳菲あらん

この詩における韋之晋への言及を簡略にとどめたのは、すでに三十六句からなる「哭韋大夫之晋」（『杜詩詳注』卷二二）を書いていたからである。

悽愴郇瑕邑	悽愴なり郇瑕の邑
差池弱冠年	差池す弱冠の年
丈人叨礼数	丈人 礼数を叨 <small>みたり</small> にし
文律早周旋	文律 早く周旋す
……	……
素車猶慟哭	素車 猶お慟哭し
宝剑欲高懸	宝剑 高く懸けんと欲す
……	……
城府深朱夏	城府 朱夏深く
江湖渺霽天	江湖 霽天に渺たり
綺楼関樹頂	綺楼 樹頂 <small>と</small> に関 <small>と</small> ざされ
飛旒泛堂前	飛旒 堂前に泛 <small>う</small> かぶ
帟幕旋風燕	帟幕に風燕 <small>めく</small> 旋り

笛簫咽暮蟬	笛簫に暮蟬咽ぶ
興残虚白室	興は残る虚白の室
跡断孝廉船	跡は断ゆ孝廉の船
……	……
誰継方隅理	誰か継がん方隅の理
朝難将帥権	朝は難しとす将帥の権
春秋褒貶例	春秋 褒貶の例
名器重双全	名と器と双つながら全きを重んず

冒頭部分は二十歳の時に春秋・晋の郟と瑕の地（いずれも山西省臨猗県一帯の地）で韋之晋との交際が始まったことを述べる。「素車」は喪事に用いる車。一句は、『後漢書』卷八十一、范式伝に見える、「死友」であった張劭の埋葬の日に、范式が「素車・白馬」に乗って「号哭」しながら駆けつけた故事を踏まえ、「宝剑」の句は、呉の季札が徐君の死後、生前に欲しがっていた剣をその墓の樹に掛けて立ち去ったという、『史記』卷三十一、呉太伯世家に見える故事を踏まえる。「飛旒」は風にはためく銘旌。『文選』には一例が見えており、潘岳「寡婦賦」（卷一六）に、「竜輜儼其星駕兮、飛旒翩以啓路」（竜輜 儼として其れ星駕し、飛旒 翩として以て路を啓く）と言う。「帟幕」の語は左思「蜀都賦」（『文選』卷四）のほか、王融「三月三日曲水詩序」（『文選』卷四六）に、「緹帷宿置、帟幕宵懸」（緹帷は宿に置き、帟幕は宵に懸く。）と見える。ここは韋之晋の住まいのあたりに張りめぐらされた幔幕を言う。「笛簫」は喪葬の音楽を奏でる楽器。これに類似した句を持つ詩に、太宗・李世民「望送魏徵葬」（『全唐詩』卷一）がある。

哀笳時断続	哀笳 時に断続し
悲旌乍舒卷	悲旌 乍ち舒卷す

「虚白室」は、『莊子』人間世篇に孔子の語として、「瞻彼閔者、虚室生白、吉祥止止。」（彼の閔を瞻る者は、虚室に白を生じ、吉祥も止まるところに止まる。）と言う。ここは韋之晋の住んでいた閑静な部屋。「孝廉船」は、『晋書』卷七十五、張憑伝に基づく語である。丹楊の尹であった劉惔が張憑（張孝廉）の才能を認め、彼の乗る船を探させて簡文帝に推薦した。ここは韋之晋が杜甫を厚遇してくれたことを言うのである。「方隅」は辺境の地。潭州を言う。『魏志』卷十九、陳思王植伝に載せる曹植の「上疏」に、「疆場騷動、方隅内侵、没軍喪衆、干戈不息者、辺将之憂也。」（疆場は騷動し、方隅は内に侵され、軍を没し衆を喪い、干戈息まざるは、辺将の憂いなり。）と言う。

嚴武の帰葬の場合とは違って房瑄の帰葬を詠ずる詩は、杜甫が実際にそれを目にしたものではなく伝聞によるものであるが、以上見てきた三首はいずれも

成都を離れて長江を下り、さらには洞庭湖の南に入ってからの作である。強い望郷の念を抱いていた杜甫であったが、いつ帰郷を果たせるのか、現実的な見通しは全くなかったと言ってよい。このことと関わって、杜甫のこれらの詩の中で、韋之晋にまつわる詩は帰葬される韋之晋に対する哀悼の念をひたすら描写する内容にはなっていない。「送盧十四弟侍御護韋尚書靈樾婦上都二十四韻」は、韋之晋の帰葬にこと寄せて、盧侍御の朝廷での活躍を期待するものになっているし、「哭韋大夫之晋」も彼の死後に人材が得られなければ、潭州の治安が悪化することを憂えるものになっている。ごく晩年の杜甫にとっては、治安が回復して現実的に帰郷の道が開けることこそが最大の願望になっていたことと関連しているであろう。しかし、とりわけ交流の深かった故人が帰葬されることは杜甫にとって決して他人事ではなかった。自分もいつ旅先での死が待ち受けているかわからないからである。それが杜甫に帰葬を詠する詩を残させた最大の原因であると考えられる。

注

(1) 『新唐書』卷二〇五、列女伝は後半部分をより簡潔に以下のように言う。「和子年十七、單身被髮徒跣、抵涇屯、日丐貸、護二喪還、葬于鄉。植松柏、剪髮壞容、廬墓所。」（和子 年十七、單身被髮・徒跣・續裳して、涇屯に抵り、日丐貸し、二喪を護りて還り、郷に葬る。松柏を植え、髪を剪り容を壊り、墓所に廬す。）

(2) 前稿の注にも記したが、唐代の帰葬（帰櫬）については、中砂明德「唐代の墓葬と墓誌」（砺波護編『中国中世の文物』京都大学人文科学研究所、一九九三所収）に詳しい。本稿の執筆に当たっても多大の学恩を蒙った。

(3) 管見によれば「帰櫬」の語は、杜甫「哭嚴僕射歸櫬」と陳羽「觀朱舍人歸櫬吳中」の詩題にしか見られない。

(4) この詩については拙稿「送葬詩小論—王維・皇甫冉・顧況の詩について」（『中国中世の哀傷文学』研文出版、一九九八所収）で取り上げた。

(5) 明確に帰葬を示す語に限って例示したもので、これらの詩だけが帰葬を詠しているわけではない。例えば、大曆二年（七六七）の作である岑參「故僕射裴公挽歌三首」（『全唐詩』卷二〇〇）には次のような句があって、裴耀卿が絳州稷山県（山西省稷山県）に帰葬されたことがわかる。

罷市秦人送 還郷絳老迎 市を罷めて秦人送り 郷に還りて絳老迎う 〈其の二〉

礼容還故絳 寵贈冠新田 礼容 故絳に還り 寵贈 新田に冠たり 〈其の二〉

富貴徒言久 郷閭没後帰 富貴 徒に言うこと久しきも 郷閭 没後に帰る 〈其の三〉

さらに、劉禹錫の七絶「傷循州渾尚書」（『全唐詩』卷三六五）は、元和十一年（八一六）冬、王承宗との戦いに敗れ、責任を問われて韶州（広東省韶関市）の刺史へ、ついで循州（広東省恵陽県）刺史に左遷されて一年余りで死んだ渾鎬が帰葬されるのを詠じている。

貴人淪洛路人哀 碧海連天丹旆回 貴人 淪洛して路人哀しみ 碧海 天に連なりて丹旆回る

遙想長安此時節 朱門深巷百花開 遙かに想う長安の此の時節 朱門 深巷 百花開くならん

咸通（八六〇—八七三）末年の進士である張喬が、府試の正文であった李建州（李頻）の死を悼んだ五律「弔建州李員外」（『全唐詩』卷六三八）も帰葬を詠じている。

銘旌歸故里 猿鳥亦悽然 銘旌 故里に帰る 猿鳥も亦悽然たり

已葬桐江月 空廻建水船 已に葬る桐江の月 空しく廻る建水の船

客伝為郡政 僧説読書年 客は伝う郡を為むるの政 僧は説く書を読むの年

恐有吟魂在 深山古木辺 恐らくは吟魂の在る有らん 深山 古木の辺

劉禹錫と張喬の詩も広義の帰葬詩に含まれると言えるであろう。

(6) この墓誌については、川合康三『中国の自伝文学』（創文社、一九九六）に紹介されている。

- (7) 『旧唐書』卷一九一、及び『宋高僧伝』卷九に伝がある。
- (8) 『新唐書』卷一三九の本伝には、「房琯字次律、河南河南人。……召拜太子賓客、遷礼部尚書、為晋・漢二州刺史。宝応二年、召拜刑部尚書、道病卒、贈太尉。」(房琯 字は次律は、河南河南の人。……召されて太子賓客を拜し、礼部尚書に遷り、晋・漢二州の刺史と為る。宝応二年、召されて刑部尚書を拜せんとするも、道に病みて卒し、太尉を贈らる。)と記されており、死亡した時期を明示しない。
- (9) 杜詩に見られる江漢の語については、拙稿『江漢』札記「詩語のイメージ」(『北海道教育大学紀要』四九一―一、一九九八・八)参照。
- (10) 鈴木虎雄『杜少陵詩集』卷二三は、これを襲って「字解」で「侍御史盧某、弟とは表弟、作者の祖母は盧氏、盧侍御は作者の母方の年したのいとこなり。」と言う。杜甫の祖父杜審言の「繼室」が盧氏であることは、杜甫の「唐故范陽太君盧氏墓誌」(『杜詩詳注』卷二五)に、「維天宝三載五月五日、故修文館學士著作郎京兆杜府君諱某之繼室、范陽縣太君盧氏、卒於陳留郡之私第、春秋六十有九。嗚呼、以其載八月旬有一日、發引於河南之偃師而歸葬。」(維、れ天宝三載五月五日、故の修文館學士著作郎京兆杜府君諱某の繼室、范陽縣太君盧氏、陳留郡の私第に卒す、春秋六十有九。嗚呼、其の載八月旬有一日を以て、發引して河南の偃師に歸葬す。)とあることからわかる。彼女も陳留郡(河南省開封市の西北)から偃師(河南省偃師縣)へ歸葬されたのである。しかし、盧十四弟をいこと称するのは適切ではなく、『讀杜心解』卷五の四に、「盧為公祖母族。」(盧は公の祖母の族為り。)と言うのが妥当であろう。ちなみに、病んで食事にも不自由をしていた杜甫は盧十四弟(盧侍御)に五律「江閣臥病走筆寄呈崔盧兩侍御」(『杜詩詳注』卷二二)を寄せ、彼が柩を護って旅立ったあとにも五律「舟中夜雪有懷盧十四侍御弟」(同、卷二三)を作り、尾聯において、「不識山陰道、聞鷄更憶君」(識らず山陰の道、鷄を聞きて更に君を憶う)と詠ずる。晩年の杜甫にとって、彼は心を許せる数少ない人物の一人であった。
- (11) 『新唐書』卷一五八、張建封伝では簡略化して、「湖南觀察使章之晋辟署參謀、授左清道兵曹參軍、不樂職、輒去。」(湖南觀察使章之晋 參謀に辟署し、左清道兵曹參軍を授くるも、職を楽しまず、輒ち去る。)と言う。なお、杜甫には張建封を送る「別張十三建封」(『杜詩詳注』卷二二)がある。
- (12) 『詳注』などの諸注や現代の韓成武・張志民『杜甫詩全訳』(河北人民出版社、一九九七)も「憤賦」の「棄虛白之室、婦長夜之台」(虚白の室を棄て、長夜の台に帰る)という句を典故として引くが、出典未詳。
- (13) 『元和姓纂』卷二によれば、唐代の韋氏には西眷・東眷の韋氏と称される、魯国の鄒の人であった漢の丞相韋賢がここに移り住んだことから始まる京兆杜陵の韋氏と、分支で「大雍州房」「小雍州房」と号される雍州(京兆)万年の韋氏、ほかに東眷の韋氏の分支である襄陽の韋氏、同じく京兆諸房韋氏などが韋氏の家系として見えている。韋之晋は北魏の韋青の子である韋穆を祖とする東眷の韋氏に属する。従って京兆に歸葬される韋之晋の柩を見て、杜陵に住んだことのある杜甫の望郷の思いがいっそう強く喚起された可能性もある。

(札幌校教授)